

長谷川 泉著

川端文学の機構

教育出版センター

著者略歴 長谷川 泉 (はせがわ いずみ)
大正7年2月千葉県生。一高をへて昭和17年東大
国文学科卒。東大大学院修了。清泉女子大教授・
東大講師などを歴任。
現在、学習院大・国学院大講師。医学書院社長。
現住所 〒113 東京都文京区西片1-1-11。

主要著書

「森鷗外」「森鷗外論考」正・続 「鷗外『キタ・セク
スアリス』考」正・続 「鷗外文学の位相」「鷗外
文学の機構」「鷗外文学の側溝」「近代文学研究法」
「川端康成論考」「川端文学への視点」「川端文学の
味わい方」(明治書院)「近代名作鑑賞」「近代日本
文学思潮史」「鷗外文学の涓滴」(至文堂)「川端文
学の機構」「近代日本文学の側溝」「文章を書く心」
(教育出版センター)「近代日本文学評論史」(有精
堂)「近代日本文学の位相」上・下 (桜楓社)「心
象幻想」「長谷川泉詩集」(アート・プロデュース
株式会社)

© 1984 Kawabata Bungaku no Kikō by Izumi Hasegawa

昭和五十九年五月十日

初版発行

定価三、六〇〇円

選研究
書 37

川端文学の機構

著者 長谷川 泉
発行者 柴崎 芳夫
印刷所 興英印刷

発行所

株式会社 教育出版センター

〒170 東京都豊島区北大塚三-19-1
電話(03) 917-8930(代)
振替 東京 〇一四六二二

序

本書は川端康成について、既に上梓して来た「川端康成論考」「川端文学への視点」「川端文学の味わい方」「川端康成—その愛と美と死」「心象幻想」につぐ著である。

一高の「校友会雑誌」に唯一作だけ発表されていた川端康成の処女作「ちよ」を発掘し、また昭和十四年に当時二階堂に住んでいたこの作家を文芸部委員として初訪問してிரらい、川端文学への関心は上記の著のほか幾つかの編著に、さまざまな形で纏められて来た。

それらの中で、本書に纏められた内容は、私の川端論の中では多年の精力を傾けたものである。最近、私が代表理事をしている川端文学研究会において、若い世代の研究者が多く育っており、特別会員として協力を願っている全世界にわたる海外の研究者も含めて、その成果がいちじるしい。すなわち、世界的規模での研究が進んで来ているといえる。

私が編集委員会代表をつとめた「川端康成研究叢書」全十巻、補巻一卷は、そのような動向に支えられたものである。一人の作家を対象にして、このような研究叢書が完成されたことは、研究史上、画期的なことだと思ふ。折から新潮社版の「川端康成全集」が三十五巻で完結をみ、さらに補巻二巻が刊行されることになった。多くの新資料が加わったから、研究者には有難いことである。財団法人川端康成記念会では、上述の全集に盛り得なかった新資料については、何らかの形で公にして行く計画を持っているから、そのことも研究者にとっては有難いことである。

本書に収録した諸論考は、既に絶版になっている「文芸画集 伊豆の踊子」に収めた『「ちよ」と『伊豆の踊子』』の巻頭から、やはり絶版になっている「増訂 川端康成作品研究」に収めた「時空を超越するもの」の巻末にいたるまで、諸書・誌に発表した論文を補訂したものである。上記の「川端康成研究叢書」に発表した論文を増補したものや、「国文学解釈と鑑賞」誌に初出の論文や、求められて「川端康成」特集の「浪速書林古書目録」の巻頭に収めた論文などからなる。

いずれも、現時点での研究動向を勘案して、増補につとめた。『「掌の小説」論』なども、従来の「掌の小説」の扱い方からすると、私は三十五巻本「川端康成全集」の出る前に、私なりに発掘した諸作品を加えて、最も多い一四六作品をもって構成していた。しかし、本書の『「掌の小説」論』においては、一四七作をもって構成した。そして、従来、初出不明のために、整理番号の異なるものを生じていたことがあるが、今回は判明した初出書誌によって整理番号を打ち直した。ゆえに、今後は「掌の小説」一四七作品は、本書の整理番号を採用して欲しいと思う。

本書が今後の川端文学研究の道標の一つとなっていくことができれば幸いだと思う。昭和十四年に初めて二階堂の川端家を訪れていろいろの感慨の去来するものを覚える。

昭和五十九年二月

長谷川 泉

目次

序	1
---	---

I

「ちよ」と「伊豆の踊子」	13
康成の出世作「伊豆の踊子」	13
伊豆旅の原体験が結晶するまで	14
処女作「ちよ」と「処女作の祟り」	17
「伊豆の踊子」の浄化作用	20
根岸敬画伯との邂逅	23
「伊豆の踊子」の創作動機	25
「伊豆の踊子」理解の諸要因	25
孤児根性の歪み	32
愛の薫染	37

心霊学的な感応、予知……………	43
-----------------	----

「招魂祭一景」の新感覚……………	45
------------------	----

処女作の意味……………	45
-------------	----

「招魂祭一景」の迎えられ方……………	47
--------------------	----

構成と文体……………	55
------------	----

前衛芸術の流れの中での位置……………	58
--------------------	----

「十六歳の日記」の開眼……………	59
------------------	----

「十六歳の日記」の発表書誌……………	59
--------------------	----

処女作としてのおし出し……………	63
------------------	----

「十六歳の日記」の特色……………	65
------------------	----

「十六歳の日記」の文章……………	70
------------------	----

「掌の小説」論……………	75
--------------	----

掌の小説の意味……………	75
--------------	----

川端康成の掌の小説群……………	79
-----------------	----

掌の小説著作目録……………	80
---------------	----

新収録の作品群について	90
掌の小説の分類	103

「新晴」と「篝火」	107
-----------	-----

「篝火」原稿の発見	107
-----------	-----

「篝火」「南方の火」の背景・事実	110
------------------	-----

「篝火」初出と全集文の対比	113
---------------	-----

眷恋「新晴」そして「篝火」	118
---------------	-----

「篝火」と別の「新晴」	118
-------------	-----

登場人物その他の対比	120
------------	-----

Ⅱ

「水晶幻想」の構造	127
-----------	-----

「水晶幻想」「玻璃幻想」の意味	127
-----------------	-----

鏡の結象力と幻想	129
----------	-----

夫婦と性と科学と愛……

犬の交配に触発された発展……

137 132

「禽獣」のモチーフ……

「禽獣」に登場する生き物の「魚」……

「禽獣」における「人間」……

「禽獣」における「禽」……

「禽獣」における「獣」……

「禽獣」の時間と空間……

153 152 149 143 140 140

近代文学史における「雪国」の位置……

文学史上の川端文学……

川端文学の系譜……

川端文学の系譜中の「雪国」……

日本近代文学の展開の中で……

165 158 156 155 155

「生命の樹」と戦争……

「春の日」と「愛の日」……

170 170

時間・空間の逆接……………	173
鹿屋海軍特攻基地の背景……………	174
戦後に残された戦争の傷痕……………	176
日本の再出発と新しい生命……………	178

川端文学における「名人」……………	182
-------------------	-----

作者執着の「名人」……………	182
「名人」の発表書誌……………	183
改作の苦心と作業……………	188
川端作品における男性像……………	193
「名人」の各章構成と内容……………	196
観戦記と記録小説……………	200

Ⅲ

「山の音」における性……………	205
登場人物の男女群像……………	205
「山の音」の女性群……………	207

尾形夫妻の性と心理……………	209
美化された永遠の女人義姉……………	212
信吾の性の観念と現実……………	214
三家族構成の複雑な心理……………	218
信吾と菊子の関係の機微……………	226
菊子の人工流産とその後の展開……………	231
「千羽鶴」と「波千鳥」……………	235
「千羽鶴」のちか子と太田未亡人……………	235
「波千鳥」のちか子……………	238
処女妻ゆき子と性への開眼……………	241
一般論としての男女の性と特殊例……………	247
「弓浦市」の作品構造と背景……………	250
登場人物の解析……………	250
村野婦人の存在と意義……………	253
弓浦市の位置と意義……………	256
大島の波浮の港に擬する意味……………	259

「たんぽぽ」の構造……………264

「たんぽぽ」が設定された背景……………264

久野・稲子と稲子の母……………268

時間の逆回転の中での回想……………272

人体欠視症の設定……………276

IV

川端康成の文芸時評……………281

時評家としての出発……………281

横光利一への傾倒……………284

短篇・掌篇小説への目……………288

新感覚派の論議から……………289

新人才華の発掘……………294

仏教・キリスト教・心霊学……………299

方法論意識や表現の問題……………301

川端文学における風俗と社会……………304

書かれざる川端作品……………	304
実存と虚構との機微……………	306
「主題」と生活の実存の破片……………	309
「美しい日本の私―その序説―」から「日本文学の美」まで……………	313
「美しい日本の私―その序説―」の原稿……………	313
原稿と定本との対比……………	314
川端的時空間の特色……………	320
「美の存在と発見」の意義……………	322
「日本文学の美」の意義……………	327
時空を超越するもの……………	329
未完の「岡本かの子」……………	329
遺書の問題……………	333
輪廻転生の時・空の超越……………	335

「ちよ」と「伊豆の踊子」

康成の出世作「伊豆の踊子」

川端康成の処女作は、見方によって三作品があげられる。発表の順序からすれば「ちよ」（大正八・六、一高（第一高等学校）の「校友会雑誌」）、「招魂祭一景」（大正一〇・四「新思潮」）、「十六歳の日記」（大正一四・八―九「文藝春秋」）がそれである。

ただし「十六歳の日記」は、発表こそ康成二十七歳の時で、時代が下っているが、原型を問題にする場合には、文字通り十六歳の時の日記なのであるから、大正三年にさかのぼることになり、この作品が以上三作品のなかでは、いちばん最初ということになる。

「ちよ」は一高の文芸部の機関誌であった「校友会雑誌」に発表された作品であるから、当然のこととして読者は限定されていた。この作品が問題にされるようになったのは戦後のことである。私が「ちよ」の内容を紹介し、この作品に意味を持たせて「伊豆の踊子」論を書いたことが契機となっている。ただし、康成自身は「処女作の祟り」（昭和二・五「文藝春秋」）という短編を書き、そのなかで「一高の『校友会雑誌』に『ちよ』と云ふ小説を出した。これが僕の処女作である。」と書いている。昭和二年に、すでに「ちよ」を処女作として確認し、また「ちよ」を処女作として書いたために、ちよという女性に祟られたことを認めていたのである。しかし「ちよ」を重視し、「ちよ」

を手がかりとして康成論を展開することは長いこと放置されていたことになる。

処女作というのは、ふつう一作に絞られる。だから、康成の処女作は「十六歳の日記」「ちよ」「招魂祭一景」三作のうち、正確にはどれか一作に絞るべきである。しかし、康成自身がこの三作品については、それぞれの時点で、いずれも処女作と言ったことがある。だから、この三作品のうちのどの一作に絞るかということには複雑さが加わる。見方によって違うからである。

しかし、出世作ということになると、事情が全く違う。誰でも、ためらいなく「伊豆の踊子」(大正一五・一一「文芸時代」)をあげる。そして、康成は「伊豆の踊子」によって文壇における位置を確実にした。新感覚派の拠点であった同人雑誌「文芸時代」も「伊豆の踊子」を代表作品の系譜に掲げる。「伊豆の踊子」は末拡がりに若い世代の読者を獲得して、康成作品の代表作として重要な位置を占めることになった。

伊豆旅の原体験が結晶するまで

「伊豆の踊子」の発表は大正十五年であるが、この作品の素材となった康成の伊豆の旅は、大阪府下宿久庄(しゆくくのしやう)の親戚川端松太郎にあてた葉書によって、大正七年十月三十日修善寺着、三十一日修善寺発、湯ヶ島行き、十一月二日湯ヶ島発、天城峠を越えて湯ヶ野着、ということが確認される。二日、湯ヶ野発の絵葉書に、下田まで行くことがしるされており、「毎日当もない呑気極まる旅を続けてゐると身も心も清々と洗はれるやうです。東京へ帰るのが厭になります。」と率直な心境が吐露されている。一高二年生の時のことである。

故郷から送金があったことと、一高の寮生活から解放されたい心のきざしによって、寮の同室の者たちにも無断で飛び出した最初の伊豆旅行であった。この旅で邂逅した踊子たちの一行といっしょに下田までの行動を共にし、その